内閣官房参与　西村六膳

特別講演
「低炭素化社会に向かう世界の動きと日本の技術」
低炭素化への投資と革新技術開発こそ日本の将来を決めると言って過言でない。世界もそこに向かって邁進していて、第二次産業革命が進行中だ。
日本は高い優れた技術で世界を牽引してきた。今後は裾野広く革新技術開発を進め、分散電力、分散資源利用などにより、地方の開発や地方の価値醸成も視野に入れて世界と競争する時代だ。

略歴
昭和15年　北海道札幌市　生まれ
上智大学を経て外務省に入省
官房総務課長、在シカゴ総領事、欧亜局長、経済開発協力機構（OECD）駐在大使、メキシコ駐在大使などを経て、2005年より地球環境担当大使、気候変動担当政府代表。
2007年より内閣官房参与（気候変動問題担当）。
2008年G８北海道洞爺湖サミットの際、気候変動問題での福田総理シェルパ。

麗澤オープンカレッジでの特別講演より

「地球規模では150年前に比べて0.6度気温が上昇している。ヒートアイランド現象も関連しているとは言え、昨晩のように耐えがたい暑さを感じるようになり、確実に温暖化は進んでいる。今後80年のうちに、いかなる対策を講じても、地球の気温はさらに1.3度上昇することは不可避と言われており、150年前と比較すると約２０度の気温上昇となるため、今からその流れを変えなくてはならない。今まで、日本になかった病原菌が蔓延する恐れがあるなど、温暖化の問題は、政治的にも経済的にも人間生活に直結する深刻な問題である。80年先は自分に関係ないとするのではなく、子や孫が生きる、次世代の環境をよくするために、今何ができるかを考えてはどうか」と強調されました。

さらに、国際社会においては、豊かな国は経済発展の影で石化燃料を大量に消費した結果、CO2排出による地球の温暖化に直接関与した責任を自覚しており、中でもヨーロッパはCO2排出削減に積極的に取り組んでいる。また、豊かでない国は豊かな国の過去の責任を追及する一方で、アメリカとほぼ同等のCO2排出国である中国も取り組んでいる自国でのCO2排出削減に向けた行動をとり始めている。一方、京都議定書を離脱したアメリカでは共和党、民主党のいずれの大統領候補者もCO2削減に向けた取組みに前向きな姿勢を見せており、2009年にコペンハーゲンで開催が予定されているCOP15(Conference of Parties)には参加するものと思われると述べられました。

日本のCO2排出量は全世界の4.5%であり大変な優等生である。オイルショック後の「省エネ対応」と日本人のDNAとも言える「もったいない精神」でここまで来たが、洞爺湖サミットを機に2050年には現在の排出量の60-80%をさらに削減する方針を打ち出した。21世紀における国際社会での生き残り競争に勝つためには、日本はさらに低カーボン社会を進める必要があり、また石化エネルギーに頼らずエネルギーを自給できる体制をつくるべきであることを指摘し、講演を締めくくられました。

―― 外務省の外交官として多くの国に赴任し、海外から日本という国を客観的に見てきた西村六善さんに、日本の価値観を自分のものにすることの大切さについてうかがいました。

日本の豊かな価値観を自分のものにする
個人の思いや信念を生かす

― 西村さんは、外交官として国際的に活躍されてきました。この道に進まれたのはどのようなきっかけだったのですか。

西村　私は札幌の生まれで、それまでに国際的な活動をしていた家族はいませんでした。外務省に入省したきっかけは、考えてみるとあまり格別なことはないのです。あえて言うなら好奇心が旺盛で、世界を見てみたかったということだと思います。それと、母から「人の役に立つように」と、よく言われていたことも関係していると思います。ですから、好奇心と母の言葉、その二つですね。

外務省に入る人には、外国との接触がそれまでにあったり、外国で生活した経験を持って、最初から外交に使命感に燃えている方が比較的多いようです。しかし、私は入省してから学習を重ね、使命感を培っていった部分が多いですね。

― 学習を重ねる間、外交に対して、どのようなことを思われましたか。

西村　長い積み重ねがあるのだ、と。日本の外交を背負われてきた先人、外務省の諸先輩には立派な方がたくさんいます。そういう方々が書き残してくれた書物はよく読みました。もちろん、外国の外交官が書いた本にも目を通しました。実際に外交に携わるようになって思いましたのは、国と国とが相対している国際関係の中で、深刻な問題をいくつも抱かかえている。それがカッコつきで「外交」と捉えられがちですけど、実態は生身の人間の接触だと思うのです。外交というのは、国の力や組織の力、また国がどういう方向性をもって進んでいるのかということに、強くかかわってきます。ですが、外交官個人の力、あるいは個人の使命感、個人の必死な思いや信念を生かしていくことも重要なのです。

どの省庁も組織で動き、組織の中で仕事をするわけですが、外交官は組織の中にあっても個人の力や人となりが大きく影響します。伴侶も個人として役割を果たします。私の場合、妻と常に一緒でしたので、そういうことが力になりました。

個性の発揮され方が外務省の場合は、少しばかり可能性が広いと感じることはありますね。ですから、若い人に対して可能性を提示していますし、世界の中で日本がある一定の地位を占めるようチャレンジしていくことは、大きな生甲斐につながると言っています。

一つのイメージだけではなく

―今までに、どのような国に赴任されましたか。

西村　主に先進国と言われる国で勤務しました。アメリカ、フランス、イタリア、スペイン、メキシコ、オーストラリアです。アジアの国で勤務したことはありませんし、アフリカへ行ったことも実はあまりありません。

― 特に印象深い任地はどこでしょうか。

西村　任地ではありませんが、ロシアです。私の欧亜局長時代のもっとも大きな仕事は、北方領土問題の解決でした。二年ほど一生懸命に努力しました。その関係で、ロシアには住んだことはありませんが、何度も足を運びました。私は、ロシア語は話せません。優秀な通訳を介したり、英語でやり取りをしたわけですが、ロシア人と渡り合うのは好きでした。ロシア人は、組織としては問題が多いですが、それぞれの個人はなかなか好人物がそろっていました。多くは親切で人間的な人たちです。ロシア人も日本人に対して非常に親近感を持っています。

今、日本人はロシア人に対して一つのイメージに縛られていると感じます。北方領土の問題がそのイメージを作っています。昨今はグルジアに攻め入った。かつては共産主義で、強権的な専制国家だった。そういうイメージです。ですが、それだけではないということを知ってほしいのです。

ロシアは優れた文化を持っています。私もそのすべてを知っているわけではありませんが、一例を挙げれば文学です。『罪と罰』『カラマーゾフの兄弟』などドストエフスキーの著作に触れて、人生について深く考えるようになった日本人は少なくないのではないでしょうか。ロシアは、そういう文学が生まれる背景を持っています。一つのイメージだけでは真の姿はわかりません。ロシアという国に住む人たちがどういう生き方をしているのか、どのようなことに心を動かしながら生きているのかということをもっとよく知る必要があると思います。

― 固定観念を持たない？

西村　そうです。相互理解と言ってもよいでしょう。例えば、日本人は、アメリカはなんとなく気安い国だという意識を持っています。年間数百万人が渡航しています。現地でハンバーガーを食べ、ディズニーランドやグランドキャニオンを訪れ、サンフランシスコの情緒あふれる町並みを見て、〝ああ、アメリカは雄大で素晴らしい〟という一つの印象を持って帰国します。ですが、現実のアメリカには、人種的な問題もあるし、日本人では考えられないような保守派と革新派の対立が存在します。また進化論を信じない人たちが強い勢力を持っています。人工妊娠中絶の是非をめぐって国が二分されていることなど、多くの日本人は知らないのです。

アメリカ人は解放的で愉快で親しみやすい親切な人々です。そういうイメージを持つのはよいのです。ただ、それだけではなく、アメリカは私たちが考えている以上に複雑な精神構造の国で、多くの問題を抱えています。それを悩みながら克服しようと社会が必死に格闘している。そういう部分にも、日本人は目を向ける必要があるでしょう。

豊かな感覚を自覚する

― 逆に、海外から日本はどのように見られているのでしょうか。

西村　基本的には前向きに、つまりプラスに見られています。日本という国は、すごく立派な国である、と。日本は、戦後の荒廃から、急速に復興し、発展しました。技術力の高さや社会システムの正確さ。公衆衛生観念の高さ。時間をきちんと守り、日本製品は壊れにくい。経済的に世界を席捲するような大きな国となっていることで、憧れや尊敬の念を得ています。

しかし、今よりも昔のほうがもっと高く評価されていたといえるでしょう。昔というのは、江戸末期から明治の初めにかけてです。その時代に、外国からたくさんの人が日本を訪れました。そして多くの文章を残しています。それをまとめた『逝きし世の面影』（渡辺京二著、平凡社刊）という有名な本があります。この本は、お勧の一冊です。その時代、日本は貧しかった。しかし、支配階級から虐げられて貧困にあえいでいるという状況ではありませんでした。貧しく質素ではあるのですけれども、愉快に楽しく和やかに人生を送っていると、その本にはあります。私が読んでも、ときに感動を覚えるほど印象的なことが書かれています。それ以外にも、美的な表現の豊かさや美についての神秘的な意識の高さ、強さ、幅の広さというようなことが、ものすごく外国から評価されています。それは日でも同様です。

― 美への意識の高さですか。

西村　ええ。あまり意識されていないかもしれません。華道や茶道、それに俳句や和歌に何百万という日本人が熱中していますよね。いたるところで俳句の講座や和歌の勉強会が開かれています。私の妻もそういう集まりに参加している一人ですが、日常生活の中に詩的な環境がある。普通の主婦が普通の生活をしていて、詩的に自分の気持ちを表現している。そういう人たちが日本の津々浦々にいます。

お茶会でしたら、みんな、どのような着物を着て、どのような草履を合わせるかと心を尽くします。何か月も前から日取りを決め、その時期に合わせたお菓子を注文する。そのお菓子も美的な配慮をし、

それがちょうどよい温度で届くように神経を働かせる。しかも、それはお茶会の主催者だけではなく、訪れる方みんなで心づかいを共有し、協力して会の成功をめざすのです。何から何まで、繊細で芸術的な美的感覚を働かせながら、日本の社会は動いています。

日本人は、日本人が持っている価値観を、もっとよく知っておく必要があると思いますね。自身が日本の豊かな感覚を持っていると自覚すれば、おだやかに他の国の人と豊かな気持ちで対応しようという気持ちになるはずです。

台所詩人に価値を見いだす

― 反対に、日本の問題点については？

西村　日本の豊かな感覚について述べてきましたが、日本に問題はないかと言うと、決してそうではありません。いちばん深刻な問題は、日本は未来を担う若い人をどのように育てていくかということについて、遅れていると思います。これは、一つには教育に帰着しますから常にある問題なのです。

私がフランスの大学で勉強していたとき、痛感しましたが、フランスでは教育は知識ではないのです。それは思索することなのです。私が専攻した西洋美術史ですら、日本人たる私の独自の美術史観が求められるのです。一教師がたまたまそうしているのではありません。国全体でそうしているのです。こういう環境からどういう人間が出てくるかを想像しておく必要があります。日本人はうかうかしていると、退屈な人間ととられます。実はすでにそういう傾向にあります。ですから発想がしなやかで個性豊かな日本人を育てていく必要があります。

もう一つのことは、何度も言いますが、日本の価値をよく知る日本人を増やすことです。日本の豊かな価値観の中に、他人に配慮する気持ちや親を敬う気持ち、美を追求する気持ちや自然に対する畏敬の念などが入っています。それを若い人に知ってもらう必要があります。そこが非常に重要なことだと思います。

― 視野を広く持つということですね。

西村　もちろんそれは大切なことです。外国を観察すると同時に、目を開いて自分を見ることも大切です。自分たちの豊かで美しい価値観をよく把握し自分のものにしたら、他の国、他の人との関係の中で、自然で前向きなつきあいができるはずです。そうすれば自然体でしなやかに相手の価値観を探そうとする。そういう姿勢になるのではないかと思います。

前にも話をしましたが、短歌や俳句を通じて膨大な数の日本人が詩的感興に浸っています。台所詩人とでもいうべき人々が日夜その悩み、感動、喜びを詩的に表現しようとしている。茶の間や台所に、これほどたくさん詩人になりたがっている人がいる。こういう国はほかにどこにもありません。これは日本人がどういう類の人々なのかを物語るほんの小さな一例です。

柔道の型一つとっても、さつきを愛めでる人々をとっても、小さな盆栽の中に妙なる美を見つけようとする人々に至るまで、その他、このような例は山のようにあります。日本とはそういう国なのです。こういうことが、新幹線が五分間隔で驀進するような、高度な先進技術社会の背後にあるといったことを、日本の若い人はもっとよく知るべきだと思います。

（れいろう　平成20年11月「この人に聞く」　濱島直隆　記者）

book.moralogy.jp/magazine/reirou/pdf/2011a.pdfより